

# 高等学校における日本語指導・体制整備に関する研修 オンライン第1回

## 「特別の教育課程」による日本語指導

東京学芸大学 文部科学省委託  
「高等学校における日本語指導体制の  
充実に関する調査研究」  
高等学校における日本語指導  
「特別の教育課程」の導入に向けて

研修実施日 2023年6月25日 9:30~12:00 オンライン

### プログラム（敬称略）

- 特別の教育課程の説明：『手引』『ガイドライン』より  
見世千賀子（東京学芸大学）
- 高等学校現場の取り組みの紹介 『町田高校における「特別の教育課程」の導入について』  
角田仁（東京都立町田高等学校 定時制）、川田麻記（桜美林大学）
- 「特別の教育課程」による日本語指導の実施に向けて  
齋藤ひろみ（東京学芸大学）

#### 研修資料について

教育・研修を目的とした場で参照資料としてのご提示に留めてください。部分的な切り取りや、加工は控えてください。また、本事業資料である旨を明示してご利用ください。

### 概要

参加者数（参加申し込み数） 137名

#### 研修趣旨

令和5年4月より、高等学校における日本語指導は「特別の教育課程」として編成・実施できるようになった。第1回オンライン研修では、制度とその教育課程上の位置付けの理解をねらいとして実施した。

- ・「特別の教育課程」制度の基本的事項と導入の意義の理解
- ・導入に向けた体制整備、卒業まで見据えた指導計画の立て方、支援方法の理解

参考にしていただくための具体的な取り組み事例として、東京都立町田高等学校定時制課程における「特別の教育課程」導入までのプロセスや導入後の現状および課題について、同校の角田仁さんと日本語指導において連携協力している桜美林大学の川田麻記さんにご報告いただいた。

#### 研修の成果

講義1では、制度の説明と導入の意義について講義を行った。また、講義3では、ガイドラインに基づき、日本語指導の実施に向けた基本的事項の説明を行った。アンケート結果からは、制度の具体的なイメージを持つことができた、高等学校における特別の教育課程の制度の柱が、日本語指導と教科学習につなげる指導であることだと理解できたとの声が聞かれ、内容について理解が深まったことが伺えた。

また、講義2の町田高等学校の実際の取り組み状況から、実施するための体制づくり、ネットワークづくりなどの重要性が理解できた、大変参考になったとの声があり、より具体的な取り組みへのイメージづくりに役立ったと言える。その上で、今後は、日本語力のアセスメントの方法を知りたいという声もあった。また、高校卒業後、就職を考えている生徒への支援方法、専門学科の高校における専門科目との関連について知りたいなどの要望や、全日制普通科高校の参加者からは、1～2年生に必修科目があり、日本語科目の導入が難しいため、全日制普通科高校での事例について知りたいという意見も見られた。

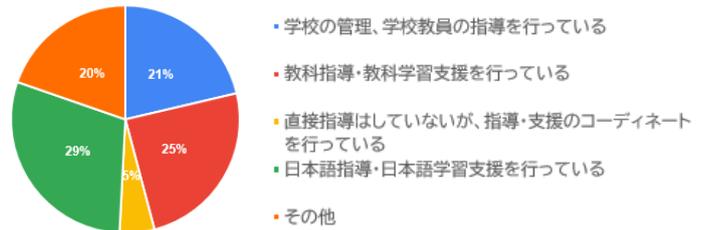
# アンケート結果（回答：61件）

## 研修に関して

### ●参加者の立場



### ●外国人生徒等の教育にどのように携わっているか

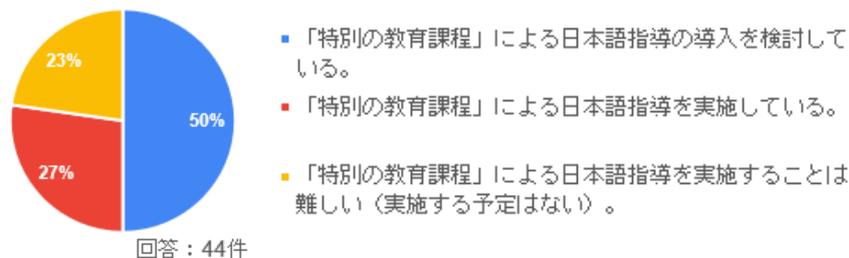


## 「本研修で参考になった点」

- 高等学校における外国人生徒等受入れの手引きや高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドラインの存在を知ることができました。
- 制度への理解が深まった。
- そのような制度のことを知りませんでしたので、具体的な取り組みをお聞きしイメージを持つことができました。
- 大きな柱は「日本語そのものの指導」と「教科学習につなげるための支援」であると明示されたことが参考になった。
- 特別の教育課程がどのような体制で行われているのか、実際に伺えたのがとても参考になりました。
- 日本語指導の体制の大切さが大変参考になりました。有効なネットワークづくりの重要性もよくわかりました。

## 「特別の教育課程」に関して

### ●実施状況



## 「特別の教育課程」による日本語指導に関する疑問・導入への不安

- ◇ 手引き、ガイドラインでは、総合学科、単位制の高校の例が挙げられています。勤務校は、普通科全日制でここに「特別の教育課程」日本語を入れるのは難しいです。1,2年生に必須科目が詰まっているためです。全日制普通科の事例を教えてください。
- ◇ 全日制の学校で、特別の教育課程を取り組まれている学校の好事例を知りたいです。
- ◇ 高校卒業後に就職を考えている生徒への支援、専門高校における専門科目との関連について、事例を知りたく思います。
- ◇ 教科を理解する日本語力のアセスメントの方法について知りたいです。

# 高等学校における日本語指導・体制整備 に関する研修 オンライン第2回

## 外国人生徒等のための「個別の指導計画」

研修実施日 2023年7月12日 14:30~16:30 オンライン

東京学芸大学 文部科学省委託  
「高等学校における日本語指導体制の  
充実に関する調査研究」  
高等学校における日本語指導  
「特別の教育課程」の導入に向けて

### プログラム (敬称略)

- 1 講義1 特別の教育課程  
見世千賀子 (東京学芸大学)
- 2 講義2 「川崎市立川崎高等学校における外国人生徒等教育のための仕組みづくり」  
根田もゆる (川崎市教育委員会)
- 3 講義3 「個別の指導計画」の作成  
齋藤ひろみ (東京学芸大学)

研修資料について  
教育・研修を目的とした場で参照  
資料としてのご提示に留めてくださ  
い。部分的な切り取りや、加工はお  
控えください。また、本事業資料であ  
る旨を明示してご利用ください。

### 概要

参加者数 (参加申し込み数) 99名

#### 研修の趣旨

「特別の教育課程」による日本語指導は、対象となる生徒の実態を把握した上で、「個別の指導計画」を作成して実施することが求められる。第2回オンライン研修では、日本語指導が必要な生徒のための「日本語指導」の教育課程上の位置付け、「個別の指導計画」の作成について学ぶ。

- ・卒業後の進路を見据えた教育方針と目標設定の重要性
- ・教科学習やキャリア支援等を含む包括的な指導計画の必要性
- ・3年間 (定時制の場合は4年間) を見通した単位履修
- ・日本語の力、母語の力、教科等の学力に応じた日本語プログラムの設計

具体的に検討するための取り組み事例として、川崎市立川崎高等学校の外国人生徒等教育の仕組みについて、担当指導主事の根田もゆるさんにご報告いただいた。

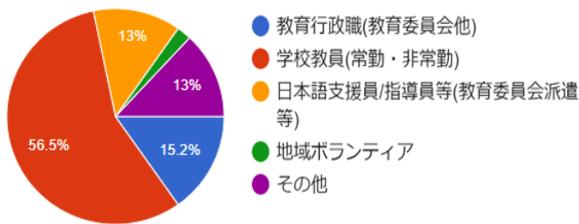
#### 研修の成果

講義1、講義2では、制度の説明と、その実施に向けた情報の提供を行ったが、アンケートの回答に見られるように、本事業の前身の「高等学校における日本語指導体制整備事業」の成果物である『手引』『ガイドライン』の具体例 (制度導入前の先進校事例) や、「個別の指導計画」の例や日本語プログラムの具体例を示して解説したことによって、実装化のイメージが具体化されている。また、川崎高等学校の教育課程の編成例から、「日本語指導」の時間を教育課程上のどの学年のどの時間に (どの科目に替えて、あるいは、加えて) 配置するかを、参加者それぞれが所属校の状況に照らして検討する機会となったようである。また、この制度を継起として、単なる日本語指導に留まらず、生徒の社会参加や自己実現に向けた教育実践を推進することの重要性が共有された。

# アンケート結果（回答：46件）

## 研修に関して

### ●参加者の立場



### ●外国人生徒等の教育にどのように携わっているか



### 「本研修で参考になった点」

- 個別の指導計画の例を手引き・ガイドラインを引用しながら説明してくださったおかげで理解が進みました。
- 日本語指導が必要な生徒が年々増加している状況が分かった。外国人生徒の現実、具体的な指導方法など、教育課程の編成方法などを学ぶことができた。
- 体制として、日本語学習コーディネータ教員や多文化教育コーディネータの配置が必要だと気付きました。
- 「個別の指導計画」様式案、日本語教育の3つの課題、4タイプのプログラム、報告の事例等が参考になりました。
- 各高校の授業設定について詳しく知れてよかったです。次回は授業内容やカリキュラムについて詳しく知りたいです。具体の困り感がある生徒に対するカリキュラムの編成の仕方が参考になりました。
- 取り組み校の具体的な支援など大変参考になりました。
- 義務教育を終えた子どもたちが、大変な思いをして進学しても退学してしまう現状があります。少しでも改善されることを願い、自分にできることを考えて実施していきたいと思っています。
- 小学校は基礎学力の保障、中学生は進学が目標になることが多いですが、高校生は社会で生きていく力や自己実現のために、実践的な日本語が必要であるということがよくわかりました。

## 「特別の教育課程」に関して

### 「特別の教育課程」による日本語指導に関する疑問・導入への不安

- ◇ 行政の取組の課題がある。教育委員会に構造的な枠組みを設置することを努力義務としても実施は難しい。
- ◇ 小中学校でもいまだに「特別の教育課程」を知らない学校関係者がいる中、高校で活用されるのか。
- ◇ 人的配置が十分に行われられないのではないか。
- ◇ 生徒の希望があれば導入する必要性があるが、学校全体で情報共有ができるかどうか不安です。
- ◇ 生徒の日本語能力を正確に把握できる先生はいるのか。教科の先生は、日本語指導についての知識をどう身に着けるのか。
- ◇ 所属校では選択科目が4年間を通じて2単位しかない無いが、日本語指導に置き換える時間が無い。
- ◇ 特別な教育課程で日本語を指導するとして、高校の教科書を理解できるほどの日本語力がまだない生徒のケースで、国語ではどのように何を教えるのでしょうか。
- ◇ 通常の学級の子とどこまで違う内容の教育課程を作れるのか。通常の授業に入っている時間の指導方法や評価等をどう扱うのか。

# 高等学校における日本語指導・体制整備に関する研修 オンライン第3回

## 「キャリアと日本語指導・教科学習支援」

東京学芸大学 文部科学省委託  
「高等学校における日本語指導体制の充実に関する調査研究」  
高等学校における日本語指導  
「特別の教育課程」の導入に向けて

研修実施日 2023年8月10日 13:00～16:00 オンライン

### プログラム (敬称略)

- 1 講義1 「高等学校における外国人生徒等へのキャリア支援」  
市瀬智紀 (宮城教育大学)・齋藤ひろみ (東京学芸大学)
- 2 講義2 「実践・取り組み事例の紹介」  
上野洋次 (埼玉県立狭山緑陽高等学校)  
坂本めぐみ (東京都立一橋高等学校)  
小川郁子 (東京都立一橋高等学校)  
加藤恵美子 (兵庫県立加古川南高等学校)
- 3 分科会による交流会

研修資料について  
教育・研修を目的とした場で参照資料としてのご提示に留めてください。部分的な切り取りや、加工はお控えください。また、本事業資料である旨を明示してご利用ください。

### 概要

参加者数 (参加申し込み数) 104名

#### 研修趣旨

高校卒業後、外国人生徒等が自律的に進路を選択し、自身の社会的役割を果たせるよう、キャリア教育について検討する。そのための日本語指導や教科学習支援には、「特別の教育課程」の導入によって新たにどのような可能性が広がるのか、実際の例を通して、その実施方法について具体的に考える。

- ・外国人生徒等のキャリア形成において配慮すべき点、具体的事例、言語習得支援との関係
- ・教科学習における、在籍学級での実践と、取り出し授業での実践例
- ・学校設定科目の日本語の授業での指導内容と授業例

具体的に検討するための取り組み事例として、埼玉県立狭山緑陽高等学校の上野洋次先生に、在籍学級においてリライト教材にを使用した国語科授業の実践例、東京都立一橋高等学校の坂本先生に「現代の国語」の取り出し授業の実践例、東京都立一橋高等学校の小川先生に「歴史総合」の取り出し授業の実践例、兵庫県立加古川南高等学校の加藤恵美子先生に学校設定科目である「日本探究」での実践例をご紹介いただいた。その後、それぞれの高校で分科会に分かれ、質疑応答を行った。

#### 研修の成果

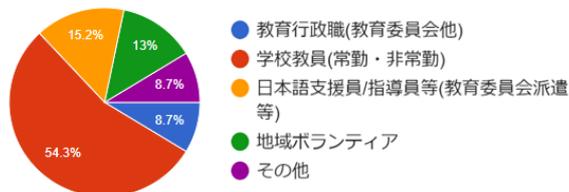
分科会では、具体的にどのようなことばで生徒に説明するのか、ご説明いただきながら再度スライドを提示いただいたり、リライト教材を作成・使用する際の注意事項など、活発な質疑応答が行われていた。アンケートでは、日本語指導、教科学習支援について具体的な教え方を新たに知ることができたとの回答が多くみられ、日本語指導・教科学習の可能性を広げる機会となったと思われる。

一方で、キャリア指導へのアプローチをもっと知りたかったという声もあり、キャリア指導に関する具体的な実践例をさらに提供することが求められている。

# アンケート結果（回答：46件）

## 研修に関して

### ●参加者の立場



### ●外国人生徒等の教育にどのように携わっているか



## 「本研修で参考になった点」

- 日本全国の高校で様々な形の「特別の教育課程による日本語指導」が行われていることを知りました。逆に、本校の実情に合わせた日本語指導ができる、する必要があるということも理解できました。
- 教科学習と日本語学習をつなげることや、学校と地域の支援団体との連携が必要と考えている関係者がいたこと。どちらも難しい面も多いことは事実だが、理想・目標としている方がいることを知れてよかった。今後、日本語支援をするためにはボランティアや支援員としてかかわるしか手段がほとんどない現状や、小中高での連携や情報共有の可能性・方策を取り上げてほしい。
- 「現代の国語」目標の設定について、これまで迷っていたことが整理された。
- リライト教材というのを初めて聞きました。大変参考になりました。ご紹介いただいた参考文献で記載があった本読み、授業に生かしていきたいです。
- 国語以外の教科の日本語指導を知れたことは、とても勉強になりました。高校でもTTの形で国語以外の教科に入っておられる学校があったのも興味深かったです。
- 社会科の取り組みに可能性を感じました

## 「特別の教育課程」に関して

### 「特別の教育課程」による日本語指導に関する疑問・導入への不安

- ◇ 教育課程の見直しは管理職にも上申しているが、現状の教員数、本校のカリキュラム等、課題が多い。
- ◇ 高等学校の日本語教育専門の教員資格の問題
- ◇ 数年後に「特別の教育課程」として「日本語」を導入予定ですが、具体的に「日本語」の授業の時間数や運営の仕方など模索している状況です。今まで、紹介のあった学校は単位制や定時制で、全日制普通科でどうするのかイメージがわきにくいので戸惑っています。
- ◇ 取り出しで行う場合、評価をどうするかという部分が他の生徒たちとの兼ね合いで、難しい、どうすればいいのかと思う。
- ◇ 特別の教育課程による日本語教育の枠組みについては整ったのですが、肝心の授業について（特に日本語初級、中級、上級）相談をする人がおらず困っています。マネジメントシートの作成や授業の内容について話し合える場が欲しいです。
- ◇ 教員免許を持たない指導員です。高校では取り出しで個別指導をします。教員の皆さんとの情報交換の機会なども少なく、また日本語指導に対する知識はなく、興味関心も高くないと感じています。今の状態では導入は難しいだろうと感じています。

# 高等学校における日本語指導・体制整備に関する研修 オンライン第4回 「文化間移動とことばの発達」

東京学芸大学 文部科学省委託  
「高等学校における日本語指導体制の  
充実に関する調査研究」  
高等学校における日本語指導  
「特別の教育課程」の導入に向けて

研修実施日 2023年10月11日 14:30～16:30 オンライン

## プログラム（敬称略）

- 1 講義1 「特別の教育課程について」  
東京学芸大学 本事業調査部会委員
- 2 講義2 「文化間移動をする生徒の言語発達」  
原瑞穂（上越教育大学）
- 3 講義3 「東京都立荻窪高等学校の取り組み」  
総合的な探究の時間「金融リテラシー」～「JSLカリキュラム」の考え方で  
根岸良和・村田友作（東京都立荻窪高等学校）

### 研修資料について

教育・研修を目的とした場で参照資料としてのご提示に留めてください。部分的な切り取りや、加工はお控えください。また、本事業資料である旨を明示してご利用ください。

## 概要

参加者数（参加申し込み数） 104名

### 研修趣旨

第4回オンライン研修では、外国人高校生等が出身地域・国から日本、そして、日々、家庭と学校・地域の間で文化間移動をしていることに着目する。「文化間移動をする子どもたち」が高校生になるまでにどのようなことば（母語・日本語）の発達過程を経ているのかについて検討する。さらに、内容と日本語の統合学習の方法で実施した授業の報告を通して、思考を促し、自律的に社会参加するための言語教育について考える。

- ・高等学校における「特別の教育課程」の編成・実施による日本語指導の概要および事例
- ・文化間移動をする子どもたちのことばの発達と実態に応じた指導内容
- ・内容と日本語の統合学習の考え方に基づく総合的な探究の時間の授業例

具体的に検討するための取り組み事例として、総合的な探究の時間における授業「金融リテラシー」について、東京都立荻窪高等学校教諭の根岸良和さんと村田友作さんにご報告いただいた。

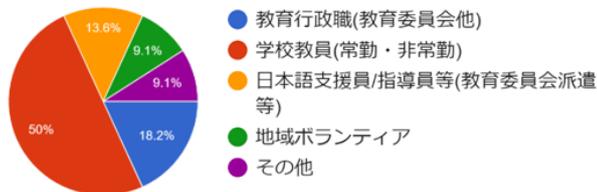
### 研修の成果

アンケートの回答にみられるように、講義1では、制度に加え複数の運用事例から、具体的なあり方と必要性を知り、講義2では、子どものことばの発達や言語の状態を踏まえ高校段階で必要な指導支援について考える機会となった。講義3では、授業事例により、高校生に必要な授業のテーマおよび内容に基づく授業の可能性を知る機会となった。講義1と2の基礎事項および講義3の実例により、参加者自身が教育活動を再考する研修となった。

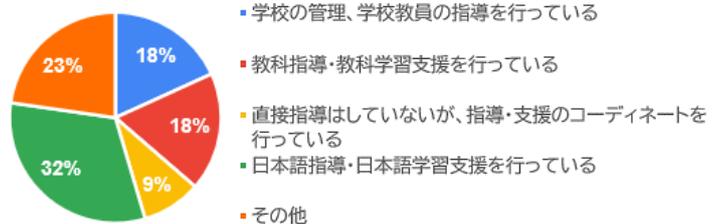
# アンケート結果（回答：44件）

## 研修に関して

### ●参加者の立場



### ●外国人生徒等の教育にどのように携わっているか



## 「本研修で参考になった点」

- 夜間中学校を卒業した生徒の進路の一つとして定時制高校の存在意義が大きいことを知ることができた。
- 義務教育との連携にも触れた内容が参考になった。
- 実際に導入・実施されている学校での取り組みの内容を教えてもらうことが最も参考になった。勤務校と全く同じ条件ではないが、各取り組みから少しずつ参考にさせてもらえるので、今後も多くの事例を挙げて紹介してほしい。
- 「特別の教育課程」について何も知らない状態での参加だったので、制度について理解することができた。また、受験というタイムリミットがあることが示され、高等学校における日本語指導は将来に直結すること、母語の支援が重要だとわかった。
- ことばの発達について、実際行われた会話なども資料にあったので、場面の想像がしやすかった。授業での実際の声かけの例や翻訳アプリについて知ることができてよかった。
- 教科の学び直しには、母語と日本語どちらの言語も使って手厚く、と言うところが印象に残った。
- 生徒の言語発達に悩んでいる。日本生まれで、一つ一つの単語の意味も理解できて教科書も読めるのに、社会が苦手という子どもの言語の状態の捉え方について参考になった。
- 学齢期を超過した方については、生活言語の習得を目指す事例が多く、学習言語習得について研究事例が乏しいので、概念が形成された高校生を対象とした事例の紹介は大変参考になった。
- 金融リテラシーの授業は共感することが多くあった。今後、経済的自立という重要な課題につながる授業に取り組みたい。
- 生徒が実感を持って参加できる、テーマ設定が大事だということがわかった。
- 特別枠のない高校でも特別の教育課程を編成して日本語指導体制が可能であることは、とても参考になると思う。

## 「特別の教育課程」に関して

### 「特別の教育課程」による日本語指導に関する疑問・導入への不安

- ◇ 高校が散在しており、対象生徒数に基準があるなら導入は難しいと考えられる。
- ◇ 管理職に対して、この制度の必要性から説明をしなければならない。
- ◇ 「特別の教育課程」のための加配がつかなければ教員の持ち時間数が増えることになり、導入が難しい。人的配置がされる方法について、非常勤も含めて知りたい。
- ◇ 発達障害がある場合には、通級の中で日本語教育を教えることになるのか。
- ◇ 特別支援教育のように、小中との連携も必須であり、単年ではなく、長期的な支援計画も考えていく必要がある。
- ◇ 特別の教育課程は評定がつかないということだったが、特別の教育課程が多い場合、その他の科目の評定で評定平均を出すことになると、生徒に不利な状況が生じないのか。評定が出ないことによる不利益に対応する策はあるか。
- ◇ 一般選抜でも外国人選抜でも同じように取り出し授業ができればよいが、評価のつけ方が難しい。

# 高等学校における日本語指導・体制整備に関する研修 オンライン第5回 「地域支援とのネットワーク」

東京学芸大学 文部科学省委託  
「高等学校における日本語指導体制の  
充実に関する調査研究」  
高等学校における日本語指導  
「特別の教育課程」の導入に向けて

研修実施日 2023年12月2日 9:30～12:00 オンライン

## プログラム (敬称略)

- 1 講義 「特別の教育課程」としての編成・実施について  
東京学芸大学 本事業調査部会メンバー
- 2 事例紹介① 「地域と共に外国人高校生等のキャリアを支援する  
ー外部団体との連携による学校内外の支援体制ー」  
一般社団法人kuriya 海老原周子
- 3 事例紹介② 「支援団体・地域との連携による取り組み」  
茨城県立石下紫峰高等学校 佐藤紘司

研修資料について  
教育・研修を目的とした場で参照資料としてのご提示に留めてください。部分的な切り取りや、加工はお控えください。また、本事業資料である旨を明示してご利用ください。

## 概要

参加者数 (参加申し込み数) 101名

### 研修趣旨

オンライン最終回となる第5回は、NPOや大学等外部との連携について、外部の立場からの関わりと、学校内で調整する立場の両方からの報告を聞くことで、地域における高校生世代の支援の在り方を知ることが目的として実施した。

- ・外国籍生徒が参加しやすい学校体制と日本語レベルと内容に配慮した授業例
- ・子どもたちの多様な背景をいかした活躍の場による自己肯定感の向上
- ・ロールモデルとの出会いを通じて自らの進路について考えるキャリアプログラムの設計
- ・地域ネットワークを活用した支援の重要性 (例：高校・大学・NPOの三者連携、教育委員会の役割)

具体的な取り組みの例として、(一社) Kuriya 海老原周子さん、茨城県立石下紫峰高等学校 佐藤紘司さんよりご紹介いただき、後半は参加者同士で情報交換を行った。

### 研修の成果

事例紹介1、事例紹介2では、外部連携による取り組みの実践例と、それらの実践における工夫について学校側と地域側との双方の視点から情報提供を行った。アンケートの回答によると、授業や学校の体制づくりにおける事例や、学校と地域との連携の仕方の具体例を知る機会となったようである。また、学校が外部団体と連携するメリットとして、支援内容の充実があげられ、地域支援とのネットワークの重要性が共有された。

高校現場での日本語指導を必要とする生徒の急増と支援者不足のなか、今回のテーマである外部人材との協力が参考になったという感想が多く、交流会では外部との連携に焦点をあてた活発な情報交換が行われ、ネットワーク作りという意味でも有意義な場となった。

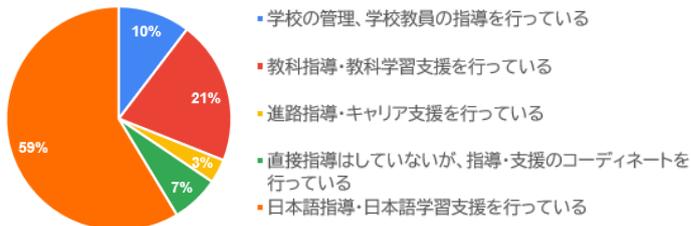
# アンケート結果（回答：38件）

## 研修に関して

### ●参加者の立場



### ●外国人生徒等の教育にどのように携わっているか

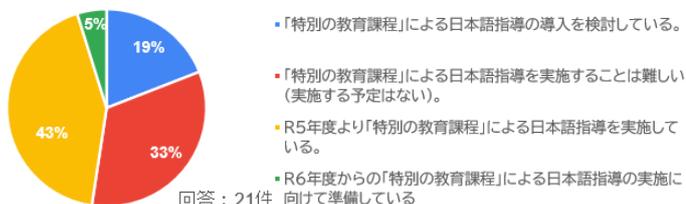


## 「本研修で参考になった点」

- 高校生に関しては地域の学習支援教室での支援となるため、地域連携をどのようにしていくかは課題です。日本語教育を知らないボランティアの皆さんとどのように支援を日本語学習にもつなげていくかという点で、たくさんアイデアをいただきました。
- 各高校の日本語指導の取り組み、カリキュラム、体制づくりが大変参考になりました。
- 自分の学校でも実践できることがないか考えさせていただいた。
- 学校と外部と一緒に生徒を支えることの良さを知ることができた。また、学校教員として他の団体とどのように関わればいいのか、また、外部団体が学校組織にどのようにしてほしいのか等を聞くことができてよかった。
- 初めての参加で、制度についてわかりやすい説明が聞けて、さらに高校での実践について、現場の担当者の生の声が聞けたことが参考になった。外部機関との連携が大切であることを学んだ。
- 外部の機関からのサポートや支援、交流について、幅広い選択肢があることが分かった。また、外国人生徒がサポート「される」側でなく、外へ出て行って、誰かを、何かをサポート「する」立場を経験することが日本語学習だけでなく、さまざまな面からプラスに働くのではないかと考えるきっかけになった。

## 「特別の教育課程」に関して

### ●「特別の教育課程」の実施状況



### ●令和6年度に向けた準備

- ✓ 生徒のアセスメント方法。本人の「客観的なニーズ」と「主観的なニーズ」の差をどう埋めるか。
- ✓ 現在の担当は定時制高校の1学年ですが、全日制への転学を希望している生徒がいるので模索中です。
- ✓ 新たな学校設定科目に対応するための教員の配置、分掌編成の検討

## 次年度の研修に望むこと

- ◇ 就職を見据えた優先順位の高い日本語指導方法
- ◇ 行政と学校、関係機関の連携の好事例、外部人材の活用例
- ◇ 特に読み替えのできない必修科目の評価方法について教えていただきたいです。
- ◇ 散在地域の高校における実態を知りたい。
- ◇ 教科担当の教員（特に国語や社会科など）との協力体制を作った実践例

# 高等学校における日本語指導・体制整備に関する研修 対面第1回

## 「高等学校の日本語指導の内容構成開発と実践

### －「特別の教育課程」による日本語指導の充実に向けて－

研修実施日 2023年7月27日 13:00～16:00 対面(東京学芸大学 C301 教室)

## プログラム (敬称略)

- 1 講義 1 日本語指導における「特別の教育課程」の導入について  
見世千賀子 (東京学芸大学)
- 2 講義 2 日本語プログラムとその組み合わせ  
齋藤ひろみ・小西円・工藤聖子 (東京学芸大学)、武内博子 (明治大学)
- 3 実践事例「日本語指導」  
佐屋麻利子 (神奈川県立座間総合高等学校)
- 4 ワークショップ  
分科会 1「日本語プログラム B の授業づくり」 文型「～たり～たり」の活動プランの作成  
分科会 2「日本語プログラム C の授業づくり」 スキル「話す／書く」の活動プランの作成

研修資料について  
教育・研修を目的とした場で参照資料としてのご提示に留めてください。部分的な切り取りや、加工はお控えください。また、本事業資料である旨を明示してご利用ください。

概要 参加者数 (参加申し込み数) 43名

## 研修趣旨

「特別の教育課程」として日本語指導を実施する上で必要な日本語プログラムについて学び、実際に授業を設計する手順を経験することを目的として実施した。そのために、研修を講義とワークショップで構成した。

講義 1、2 では、特別の教育課程と、A～D の 4 タイプのプログラムの内容構成の考え方とシラバス例・授業例について解説した。実践事例として、神奈川県座間総合高等学校教諭の佐屋麻利子さんより、日本語科目について、学年の目標と科目の構成、配置、日本語及び教科の指導事例を紹介した。ワークショップでは、3つのグループに分かれて、プログラム B とプログラム C に関し、実際に授業を設計する体験の機会を提供した。

<プログラム> A : 生活のための日本語 B : 日本語基礎 C : 技能別日本語 D : 日本語プロジェクト

<ワークショップの内容>

分科会 1 「～たり～たり」の例文作成 → 発話練習の体験 → モデル会話づくり  
分科会 2 生徒の課題場面の設定 → 言語事項の抽出 → モデル会話・文づくり → 言語活動の体験  
A : 話すスキル「部活動をつくる相談をする」 B : 書くスキル「進路に関する行動予定の作成」

## 研修の成果

座間総合高等学校の日本語指導の実例やワークショップを通して、卒業までの見通しをもって日本語指導の目標を設定して計画することや、対象生徒とその目標に適したプログラム・内容で授業を実施することの重要性を共有できた。

また、管理職、担当教員、日本語指導担当者 (外部) 等と一緒に授業づくりを行うことを通して、生徒の理解や指導方法に対する考え方の違いに気づくとともに、立場の違いを超えて交流することの必要性を認識していたようである。

タイプ別 日本語指導の内容構成 (プログラムの組み合わせ)

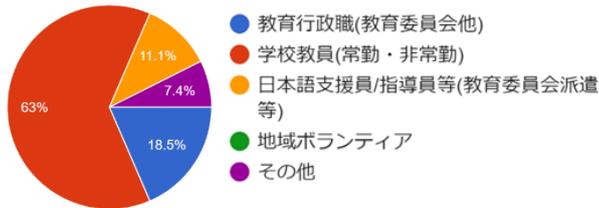


ただし、ワークショップの内容については、自身の現場の状況とのギャップを感じるという声や、対象生徒のタイプが異なるために授業づくりの経験を直には生かせないという声も聞かれた。ワークショップ型研修においては、参加者のニーズと活動内容の合致が重要であり、ニーズ別の研修の提供も求められていた。本研修のような全国規模の研修の他、各地域の自治体や学校で、生徒の課題や教師の困り感に応じた対話型・ワークショップ型の研修の実施が期待される。

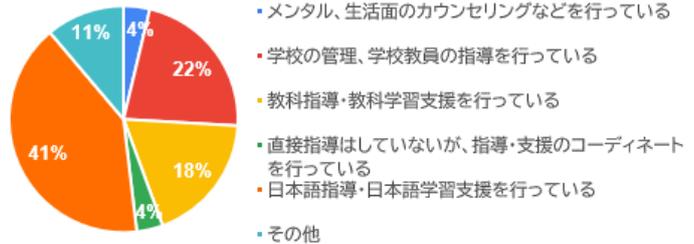
## アンケート結果（回答：27件）

### 研修に関して

#### ●参加者の立場



#### ●外国人生徒等の教育にどのように携わっているか

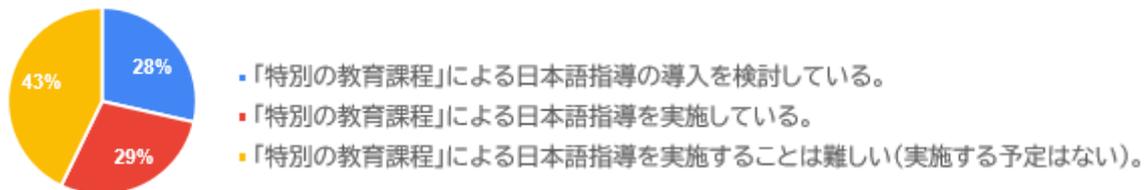


### 本研修で参考になった点／研修への要望

- 「特別の教育課程」という制度を知ったこと、先進県の事例が大変参考になった。
- 日本語指導が必要な規準とは何かが示されていたので、他の教員も判断する際に参考になりそうでした。
- 事例を写真等の授業風景を交えながら聞くことができ、自校で導入を提案する際のイメージづくりにつながった。
- 具体的な日本語の授業の組み立て方についてわかった。タイプ別の実践例が参考になった。
- 授業づくりのワークショップは、よい経験になりました。日本語基礎指導と、プロジェクト型で総合的に日本語力を伸ばす指導のはっきりとした境界がわかった気がします。
- ガイドラインの使い方がよくわかった。プログラムDのタスクの組み合わせ。高校生に焦点を当てたタスクの提示がたくさんあり、導入する際に大変参考になると思いました。
- 体制整備やネットワーク形成、母語・母文化保障、市民性育成に関心があります。
- 日本語能力レベルが異なる生徒に同教室で授業する場合の実際例も取り扱って欲しい。

### 「特別の教育過程」に関して

#### ●「特別の支援過程」の実施状況



#### ●「特別の支援過程」の疑問点・導入への不安

- ・ 昼夜間三部制の定時制で、空き教室がない等、教育環境が整わず、食堂で日本語教室と特別の教育課程「日本語」が同時に行われています。生徒数は増加しているが、アルバイト優先の生徒が増えて日本語教室への参加率は下がっています。生徒の日本語学習へのモチベーションを上げる対応が必要だと考えています。
- ・ 本校に外国籍を含む多様な生徒が入ってくるようになったが、人的配置やこの制度そのものについて話題にすらなっていない。この情報格差をどうすればよいのか。他県ではどうしているのか知りたい。
- ・ 通信制過程で導入が可能なのか、わからない
- ・ 学校組織の中でどのように提案して作成していくのか、教職員の理解をどのように図っていくのか

## 高等学校における日本語指導・体制整備に関する研修 **対面第2回** 「北陸における高等学校の日本語指導の充実に向けた取り組み」

研修実施日 2023年9月15日 13:00～16:00 対面(敬和学園高等学校)

### プログラム (敬称略)

- 敬和学園高等学校における日本語指導や外国ルーツの生徒の支援体制
- 情報提供 高等学校の特別の教育課程について
- 授業参観 授業提供：敬和学園高等学校 教諭 臼杵由美子
- 研究協議会・意見交換

研修資料について  
教育・研修を目的とした場で参照資料としてのご提示に留めてください。部分的な切り取りや、加工はお控えください。また、本事業資料である旨を明示してご利用ください。

**概要** 参加者数 (参加申し込み数) 14名

### 研修趣旨

第2回対面研修は、散在地域である北陸の高等学校における「特別の教育課程」の展開普及を目的とし、新潟県の私立敬和学園高等学校の協力を得て実施した。高等学校の特別の教育課程に関する情報提供、敬和学園高等学校における外国ルーツの生徒の支援体制、日本語指導に関する説明および授業参観を行い、最後に敬和学園高等学校の取り組みを踏まえ、参加者がかかわる学校や地域での実施に向けての意見交換を行った。

### 研修の成果

本研修では、新潟県内に限らず他県からの参加者も多く、立場も行政職、学校管理職や学校教員、日本語支援員や指導員、地域ボランティア、教員志望学生、大学教員など様々であった。参加目的についても、散在地域における高等学校の外国ルーツの生徒の教育に関する教育に関する現状把握、支援体制および日本語指導の実際の様子への関心、「特別の教育過程」の編成実施の可能性の検討など様々であった。参加者の感想には、敬和学園高等学校の支援体制および日本語の授業での様子から、日本人も含め多様な背景の生徒を受け入れていること、受験入学の生徒も留学生も包括的に指導していること、他宗教の生徒も共に学ぶ様子からお互いに受け入れ尊重し合う関係が築けていることが記述されていた。グループでの意見交換では、日本語担当教員も生徒もひとりひとりが大事にされている点が印象に残り、このことと対照的な状況にいる主に日本語指導担当者が抱える困難さに焦点が当たった。各グループは、異なる地域や立場の参加者で構成したため、それぞれの立場からの経験や見方が共有しながら、学校の支援体制のあり方や管理職の理解、日本語指導担当教員の役割などにかかわる課題を巡り、どのように解決できるか等について話し合われた。各自の立場だけでなく、複数の立場から現状を捉える機会となった。

# 高等学校における日本語指導・体制整備に関する研修 対面第3回

## 「高等学校における外国人生徒等への日本語指導の取り組み －情報の共有と学校間連携に向けて－」

研修実施日 2023年9月29日 13:00～16:00 対面(宮城教育大学 720教室)

### プログラム (敬称略)

- 1 講話「特別の教育課程」による日本語指導について  
米本和弘 (東京学芸大学教職大学院 准教授)
- 2 話題提供①「散在地域のJSL高校生に対する日本語教育の実践報告」  
菊池泰子 (仙台市立仙台大志高等学校 講師)
- 3 話題提供②「外国人児童生徒に向けて何ができるのか教科指導の側面から」  
市瀬智紀 (宮城教育大学教育学部 教授)
- 4 話題提供③「外国人児童生徒受入拡大対応業務 (県委託事業) の概要と課題について」  
伊藤友啓 (宮城県国際化協会シニアチーフスタッフ)
- 5 情報共有「県内高校の外国人児童生徒の日本語指導をめぐって」

研修資料について  
教育・研修を目的とした場で参照資料としてのご提示に留めてください。部分的な切り取りや、加工はお控えください。また、本事業資料である旨を明示してご利用ください。

**概要** 参加者数 (参加申し込み数) 15名

### 研修趣旨

高等学校における特別の教育課程導入に関する基本情報、散在地域における学校設定科目としての「日本語」の指導実態とキャリア形成について、日本語指導に加えて日本語指導担当ではない一般の教科担当の教員が、外国人生徒のいる高校の教室で教えるとき、どのような配慮をしたらよいのか等について学ぶことを目的に研修を行った。参加者は、宮城県内で外国人生徒を受け入れている高校で日本語を担当する教員を中心に、小中高等学校の日本語教員や支援者中心で全国から参加があった。

### 研修の成果

研修では、宮城県国際化協会から、今後の外国人支援にむけて「外国人児童生徒受入拡大対応業務 (県委託事業) の概要と課題について」情報提供があった。最後の情報共有では、御津あおば高等学校、茨城県教育委員会、東京都教育委員会、福岡県、岩手県、宮城県の高校のそれぞれから現状と課題について報告がなされた。それらの事例から、高校で国際課を設けて体系的に指導しているところ、留学生受け入れから派生展開したところ、非常勤にすべて任されているところなど、高校による外国人生徒への対応の違いがわかったとの声が多く聞かれた。また、情報共有の場面では、「高校で日本語を教える教師 (人材) はどこで育成されるのか」という疑問が発せられ、教科を専門とする教員が日本語教員の資質を身に着ける機会が限られていることが話題となった。